

2024～2025 支援者へのアンケート 結果

【要約】

現在、支援して頂いている17の企業・団体様からアンケートの回答を頂きました。ご協力ありがとうございました。
従来からの企業レベルでの社会貢献活動に加え、昨今のSDGs潮流の中で、「子どもの貧困問題」や「教育格差の問題」という問題意識が、より高まってきていると感じます。

支援企業・団体様からは、支援することにより、自社内・自団体内においても、「いい変化」が起きており、そのことが支援を継続する本当の意味であるとのこと意見を頂いています。本当にありがとうございます。

① 支援のきっかけと支援期間

支援のきっかけで最も多いのが、「貧困問題への関心」で、次に「居場所があることが大切だと思うから」になっています。子ども食堂を中心とした「いばしょ」ネットワークへの支援においては、企業レベルの社会貢献活動においても、やはり「子どもの貧困問題」に対する問題意識が非常に高いという結果になっています。

6割強の支援者様には定期的な支援を継続的に実施して頂いています。月に1回から年に1回までと様々です。多くの支援者様から長い期間、継続的な支援を頂いており、大変感謝しております。

② 自社・自団体内での変化

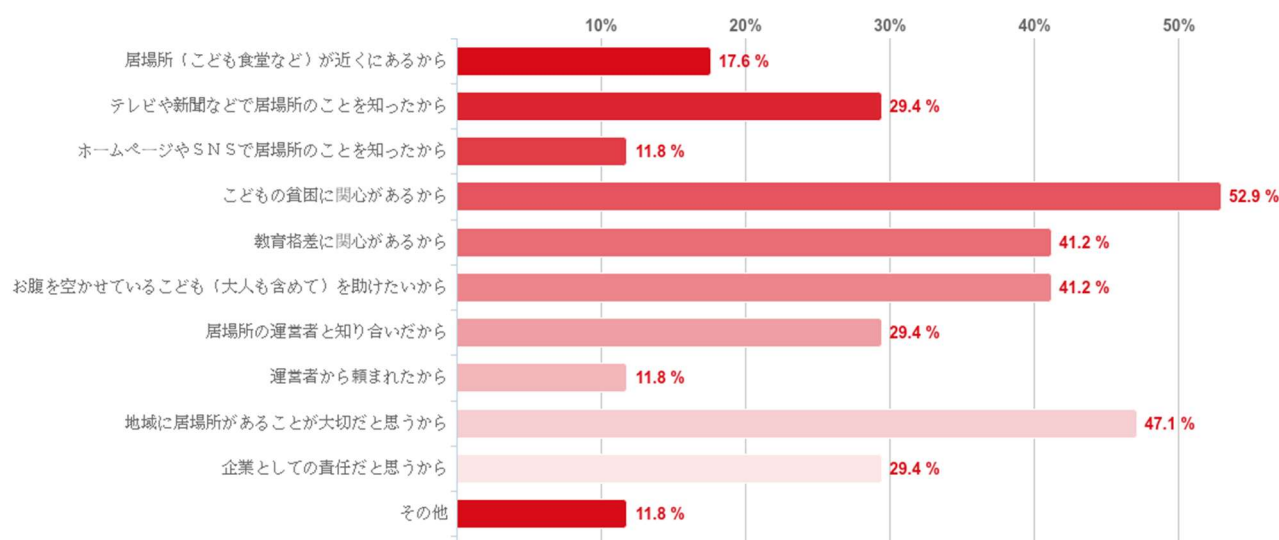
7割の支援企業・団体様が、支援を行うことによって、自社・自団体内にも「いい変化」があると回答しています。

「いばしょ」支援のエコシステムにおいて大切なことは、利用者のみならず、支援者も運営者も、全てのステークホルダーにとって「いい変化(ウェルビーイング向上)」があるWin-Winの関係にあることが大切で、今回の回答結果にとっても共感しています。

支援企業様の社内では、「社会貢献意識が高まった」という回答が8割強になっています。さらには支援企業様にとってもいい影響があるという回答も多くあります。「取引先からお褒めの言葉を頂いた(ビジネスへのプラス効果)」「(25%)」、「社員間での会話やコミュニケーションが増えた(職場でのモチベーション向上)」(25%)等です。

従来から企業の社会貢献活動はありますが、支援する人、支援される人という枠組みを超えて、支援企業様も従業員の方々にとってもいい影響を与えているというのが支援企業様からの回答です。

Q1)居場所支援のきっかけを教えてください。(回答数:17)



支援のきっかけで最も多いのが、「貧困問題への関心」で、次に「居場所があることが大切だと思うから」になっています。子ども食堂を中心とした「いばしょ」ネットワークへの支援においては、企業レベルの社会貢献活動においても、やはり「子どもの貧困問題」に対する問題意識が非常に高いという結果になっています。

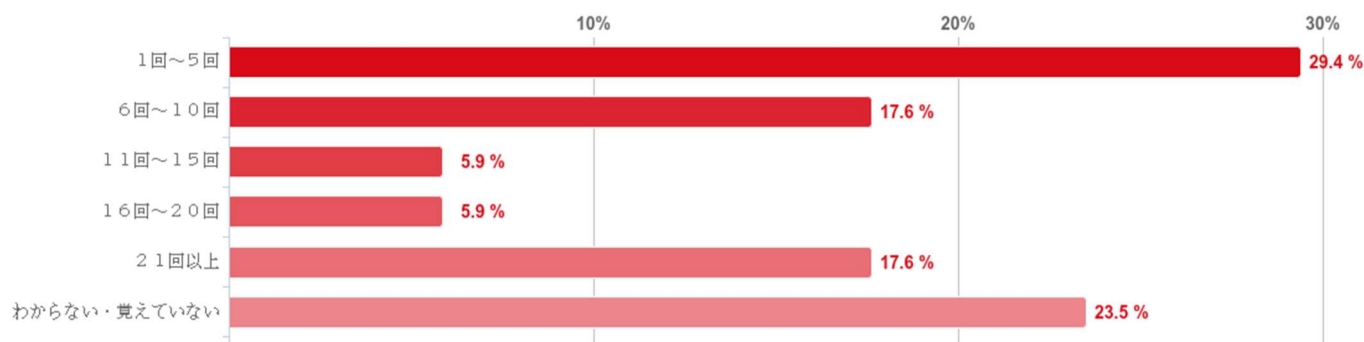
Q2)居場所支援のきっかけとなったエピソードや、社内・団体内の意思決定方法など、差し支え無い範囲で教えてください。(任意回答)

- 会社でSDGs が方針に組み込まれ、部内でもSDGs の勉強会を開催していくなかで、日本にも貧困の問題があることを知り、みんなで一緒に貢献できそうなことで最初に取り組んだのがフードドライブでそれが支援のきっかけでした。寄付先や寄付方法が分からなかったのをホームページで調べたところ、愛知子ども応援プロジェクトさんのサイトにたどり着き、伺わせていただき、そこで寄付型の自動販売機のことも教えていただきました。
- 意思決定については、アンケートを実施したり、個人で企画する場合も必要な背景を伝え、みなさん協力してくれて、上司は理解あり実践許可をくれています。SDGs が会社方針になっていても浸透は部署によって違うので、全社で取り組む場合は時間がかかることもありますが、上司が貧困問題を知ってくれてフォローしてくれることが大きいと思います。また、全社に広めるためには一つの部署が少しずつでもなにか 実践していくことで、総務部など会社全体の意思決定部署の協力を得られやすくなると感じています。
- 昨年からのお米の不足・高騰を受け、子ども食堂では苦境に立っているとの報道等を目にし、弊社で取り組みをしているふるさと納税事業で、寄附者へ支援を呼びかけることはできないかと考えたため。
- 子どもたちにメガネを届けたいプロジェクトを通して、活動内容に共感を持ってました。
- 20年ぐらい前に、子どもたちとお米づくりを始めました。できたお米をどこかに寄付しようと意見が出てきて、寄付をするようになりました。
- 現在、名古屋市の里親制度に登録しており、一歳の里子向かい入れ特別養子縁組にて我が子になりました。そんなことから児童養護施設などや里親施設との連携もしており、その間、地域の子どもの食堂にも高い関心がありました。
- ロータリークラブに入会し、クラブで子ども支援プロジェクトを立ち上げ、精力的に支援活動をされている方の熱意から 出来る限りの協力をしたい気持ちとなりました。
- 当グループのデロイト トーマツ ウェルビーイング財団から、認定 NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ様をご紹介いただきました。当グループでは、メンバーのボランティア活動を推奨しており、非営利法人の経営に精通した公認会計士が多数所属するパブリックセクター・ヘルスケア事業部のメンバーがその専門性を活かして、むすびえ様の研修会（経営管理、資産管理、会計等に関する研修会）の講師として当初は関与させていただきました。その後、子ども食堂の現場でのご支援まで、活動を拡大させていただいたという経緯がございます。
- 元々はロータリークラブの繋がり、コロナショックが始まった2月に、代表理事の藤野様から地区に要請があったことがきっかけです。定期的にではなく、季節のイベントの変わり目に、あるときだけの散発的な提供となっております。

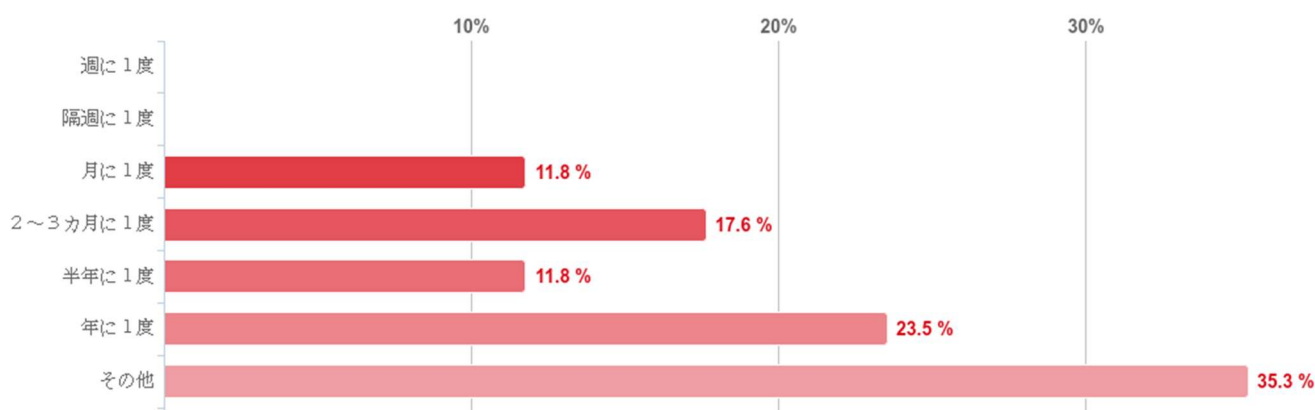
縮ですが、普段はなかなか手に入る機会のない商品とのことですので、喜んでいただければ幸いです。

- 会社としてお取引いただいている企業が、こども食堂の支援を実施しており、その取り組み内容を紹介してもらったことがきっかけとなりました。会社としても社会貢献活動に力を入れており、こどもを取り巻く貧困や格差の実態を知ったことで、何か支援できることがないかを考え、ご相談することとなりました。

Q3)今までに居場所への支援をした回数を教えてください。(回答数:17)



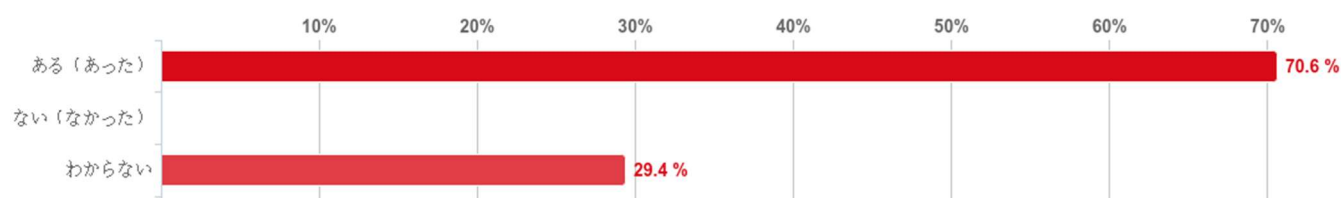
Q4)居場所への支援の割合を教えてください。(回答数:17)



6割強の支援者様には定期的な支援を継続的に実施して頂いています。月に1回から年に1回までと様々です。また「その他」が36%になっています。これは定期的な実施というよりは、不定期での様々なイベント実施や、食料寄付等を実施して頂いていることが多いためだと思います。

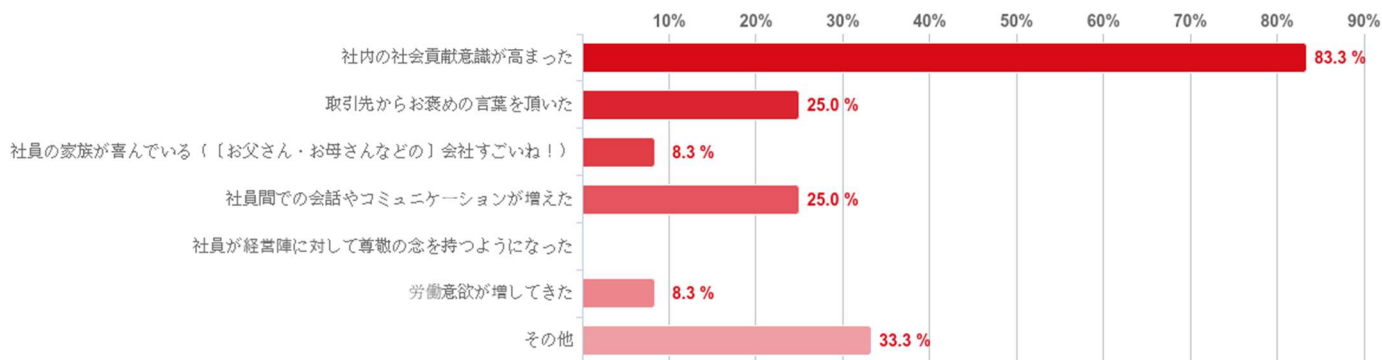
多くの支援者様から長い期間、継続的な支援を頂いており、大変感謝しております。

Q5)居場所への支援活動によって、御社・貴団体に良い変化はありますか(ありましたか)。



7割の支援企業・団体様が、支援を行うことによって、自社・自団体内にも「いい変化」があると回答しています。「いばしょ」支援のエコシステムにおいて大切なことは、利用者のみならず、支援者も運営者も、全てのステークホルダーにとって「いい変化(ウェルビーイング向上)」がある Win-Win の関係にあることが大切で、今回の回答結果にとっても共感しています。

Q6)前問で「ある」と回答された方は、どのような良い変化がありましたか？(回答数:12)

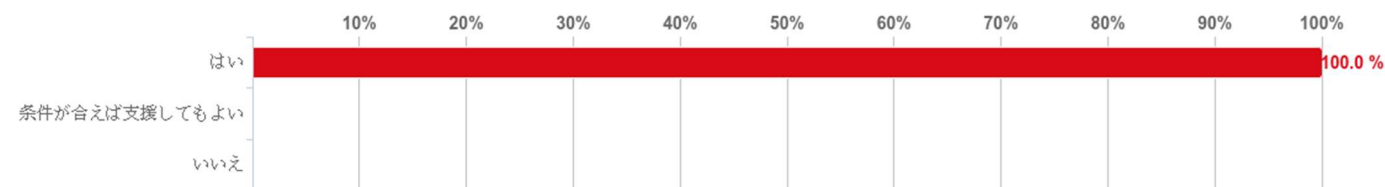


支援企業様の社内では、「社会貢献意識が高まった」という回答が84%になっています。「いばしょ」の現場に直接ふれあう支援を従業員参加型で行うことにより、従業員の方々の社会貢献意識が高まっているというのは、とてもうれしいお話です。

さらに支援企業様にとってもいい影響があるという回答も多くあります。「取引先からお褒めの言葉を頂いた(ビジネスへのプラス効果)」(25%)、「社員間での会話やコミュニケーションが増えた(職場でのモチベーション向上)」(25%)

従来から企業の社会貢献活動はありますが、支援する人、支援される人という枠組みを超えて、支援企業様も従業員の方々にとってもいい影響を与えているというのが支援企業様からの回答です。

Q7)今後も居場所への支援をお考えですか。(回答数:17)



Q8)子ども食堂や世代を超えた人々が集まる居場所について、この先に期待すること、また支援する皆様の想いや課題、今後の理想など、どのようなことでも結構ですのご記入ください。(任意回答)

- 私も含め、居場所があることを知らない人も多く、寄付活動をしながらか子ども食堂の紹介などももっとできると、寄付してくれた方々も役にたってる実感や、居場所のことがもっと広まっていくかなと思っています。
また、居場所が特別な場所ではなく、私たちにとってももっと身近になっていくといいなあと思います。
- まだまだ取り組み内容が認知、浸透していないので、広げていく活動の支援を促すことが大切に感じます。
- 困っているこどもたちに経済的支援、働き口の斡旋など、生きていく上での道筋を作って行けたらいいと思う。
- 子ども食堂の役割が日本全体へと広がり、個の存在そのものに尊厳が当たる世の中へ移行するきっかけとなり、いずれは子ども食堂の役割が終わる日がくることを祈ります。
- 当グループは毎年10月をImpact Month(インパクト マンス)と位置づけて、メンバーにボランティアなどの地域活動への参加を促進する活動を行っており、その一環で子ども食堂の活動に関与させていただいております。
子ども食堂の活動への関与をきっかけに、当グループのメンバーによる居場所づくりへの関心が高まっていくことを期待しています。
- どうしても「賞味期限」という縛りがあることで、フードロスを助長している側面があるが、十分に食べられる食品を無駄にすることなく、食べ盛りのお子さん達に喜んでもらえるのであれば、意義の高い事業として国と地域全体で支援すべきです。また単なる「食事場」ではない、子供たちの“集いの場”としての居場所の確保は、ぜひ今後とも続けていただきたいです。

- 企業の責任として、支援を継続していくことが重要であり、そのための枠組みを作る必要があると感じました。また、支援をするだけ・受けるだけではなく、お互いにより良い関係性を築いていく仕組みや形を模索していければと考えています。